



イスラエル人入植者による集団的暴力についての会見

2024年4月21日（日）

司会（タمام・クルアーン）：こんにちは、パレスチナ農業開発センター（UAWC）の記者会見へようこそ。皆さんにお集まりいただき、うれしく思います。本日の記者会見では、4月12日から16日にかけて起こったイスラエル人入植者によるボグロム（集団虐殺）を取り上げます。ガザに対する虐殺が始まって以来、極端な暴力が続いています。まず、UAWCと私たちの活動について、少しご説明します。私たちは、この記者会見を、現場となったアル・ムガイール村で開き、村の看護師や農民、コミュニティの人びとが経験したこと、そして継続的に経験していることに直接耳を傾けていただきたいと思います。UAWCの活動をご存じない方のために説明しますと、私たちはパレスチナの草の根市民社会組織です。私たちは、パレスチナの農民、漁民、また「エリアC」にあるコミュニティの安定を支援するために活動しています。私たちは、イスラエルの入植植民地支配下にある土地に人びとがとどまり、その土地を確実に守るために活動しています。そのためにヨルダン川西岸地区とガザ地区全域に事務所を構えています。私たちの活動には、土地の開墾と復旧、農作業用道路や給水システムの整備、在来の種子を守る種子バンクの運営、農業生態学的トレーニング実施、その他多くの仕事が含まれます。もっと詳しく知りたい方、私たちを応援してくださる方は、UAWCのウェブサイトをご覧ください。ソーシャルメディアをフォローしてください。FacebookとInstagramのページがありますが、ウェブサイトはuawc-pal.orgです。それではパネリストをご紹介します。UAWC国際アドボカシー・オフィサーのヤスミン・エル＝ハサンさん、UAWCロビー活動・アドボカシー・ユニットのディレクターであるモアイヤド・ブシャラットさん、アル・ムガイール村の農民であるガッサン・アブ・アリアさん、そしてアル・ムガイール村のクリニックで看護師をしているニダ・ナーサンさんです。また、村議会の議長であるアミン・アブ・アリアさんにも参加していただきます。今日の最初のスピーカーはモアイヤドさんです。起こっていること的背景を教えてください。

モアイヤド：この3年間、イスラエル人入植者による攻撃は、パレスチナの人びとがこの地での生活を続け

られなくなるような形で行われてきました。さらにこの半年でイスラエル人入植者の攻撃は激化し、ヨルダン川西岸地区の18以上のベドウィン・コミュニティを完全に立ち退かせ、多くの村で合計16人以上のパレスチナ人が殺害されました。今日、私たちがいるアル・ムガイール村は、ラマッラー県東部の重要な村です。イスラエルによる入植計画は、1976年のイガル・アロン・プロジェクトから始まりました。それは、ヨルダン川に平行するすべての地域からパレスチナ人を立ち退かせ、パレスチナ人の存在をなきものにするというもので、パレスチナ人に対する攻撃やプロジェクトによって、イスラエルはその目的を達成しました。そして、この地域で2024年4月12日から16日にかけて起こったのが最新の出来事です。1500人以上のイスラエル人入植者のグループが、ナブルス、ラマッラー、ベツレヘム、トゥバス、ヘブロン、および他の県の25以上のパレスチナ人の村やコミュニティを組織的に攻撃しました。これらの攻撃により、5人以上のパレスチナ人（アル・ムガイール村1人、バティエン1人、アクラバ村の農民1人と牧夫2人）が殺害されました。昨日（4月20日）、入植者グループはさらに別のパレスチナ人を殺しました。その被害者は救急車の運転手でした。この組織的な攻撃は、被害を受けた村々の合計で1000万シュケル（4億1000万円相当）以上の損害をもたらしました。85件以上の家屋が全焼または半焼し、11基のプラスチック製給水タンクが破壊され、自動車、トラック、農業用トラクター合計185台以上が破壊されました。農業分野では、入植者グループは、20の家畜小屋を全焼させ、200頭の羊とヤギを盗み、村の50頭以上の子羊を殺害し、養鶏場2つと搾油所1つを焼き払いました。これらの攻撃の背景には、イスラエル政府、特にベン・グヴィール国家安全保障相とベザレル・スモトリッチ財務相の2人の閣僚が、ヨルダン川西岸地区のエリアCにおいてイスラエルの入植者や入植者運動が組織的攻撃を加速させることに許可を与えているという事実があります。また、2023年10月7日から現在に至るまで、イスラエル人入植者による攻撃、また都市や難民キャンプと農地の間にある840以上の軍事検問所によって農地への立ち入りが禁止されているため、パレスチナ人がオリーブの畑や果樹園の65%以上に立ち入ることができないことを、私たちは目の当たりにし、注視しています。

司会：ニダさん、アル・ムガイール村で、この間にあなたが目撃し、対処しなければならなかった負傷について教えてください。

ニダ：第一に、ここアル・ムガイール村の私たちは、2023年10月7日のガザ攻撃以降、イスラエル人入植者による攻撃や集団虐殺にほぼ毎日苦しめられています。私たちが目撃している損失や負傷は、若い世代にも

年配の世代にも及んでいて、正直にお伝えすると大変な衝撃と恐怖を感じています。このような盲目的な攻撃は、これまでに経験したことがありません。イスラエル人入植者による攻撃は常に経験してきましたが、これほど攻撃的で、あらゆる年齢層を標的にしたものはなかったし、ここ数カ月ほど極端なものはありませんでした。特に子どもを持つ親として、ここまでひどい攻撃は想像もできませんでした。家が燃やされ、幼い子どもたちが泣き叫ぶ、そしてその母親たち。私たちは、まず誰を助けるべきなのか、どこから手をつけていいのかさえわからない状況です。誰を最初に助けるべきなのか？負傷者？母親？子どもたち？私たちの村の持つ力だけでは、もはやこの状況に対処することはできません。本当に危険で困難な状況でした。私たちには、自分たちの身を守るものは石ころ以外に何もありません。そして正直なところ、完全に武装した入植者たちが村にやってきて、近隣の村々が私たちを支援したり助けたりすることを禁止した時に、そんな石ころがどのような力になるのでしょうか？石ころという最も基本的なもので、男も女も子どもも、自分たちの身を守るしかありません。他には何もない、武器もないのですから。多くの人が負傷し倒れました。家は全焼しました。動物でさえ、入植者の暴力から逃れることはできませんでした。私たち医療従事者や看護師でさえ、入植者から攻撃され、負傷者を収容しようとした救急車も攻撃・銃撃を受けました。私たちが負傷者を安全な場所に移動させるのに必死ななか、イスラエル人たちは負傷者を放置し、出血多量で死なせたりすることさえ望んだのです。私たちがしたかったのは、負傷者を助けることだけでした。しかし、救急隊員は、その間も絶え間なく銃撃を受けました。イスラエル人たちは、すでに与えた危害だけに飽き足らず、負傷した人びとを拉致しようとしていました。さらに悪いことに、私たち医療従事者がなんとか負傷者を救急車に乗せることができて、検問所と村の出入り口はすべて閉鎖されており、負傷者を診療所や病院に連れて行くことができませんでした。新たに設置された検問所もあり、負傷者が救急車の中で血を流し続けているにもかかわらず、2時間以上も閉鎖されたままということもありました。そう、私たちは殉教者を出し、多くの危険な負傷者を抱えています。**イスラエル人入植者たちが、身体の中でも敏感で危険な部位を狙って撃ったのは明らかでした。**例えば、下腹部、膝頭、首、胸、頭などが実弾の標的となっていました。私たちはこの村にあるものでできる限りのことをしようとしていましたが、一体何ができるのでしょうか？先にお伝えしたかわいそうな殉教者、私たちは彼を助けることができませんでした。イスラエル人たちは、救急車が動くことも、誰かが救急車に近づくことも完全に拒否したのです。**2時間以上もの足止めをくわなければ、怪我による出血は止められたはずでした。**しかし、私たちのような医療従事者や看護師でさえ、救急車に近づくことが許されなかったため、彼は殉教者になってしまったのです。彼らは私たちに発砲し始めました。最も単純な救護さえ禁じられました。このような不正義とジェノサイドのなか、私たちが同胞を助けるためにほんの一步でも動くことすら許されなかったのです。私たちはすべてを目撃しました。この1週

間、私たちは戦場で起きていることを目の当たりにしました。一度に72人以上が負傷した戦場です。葬儀が攻撃されるということすらありました。葬儀でも負傷者が出たのです。葬儀の最中、入植者たちは弔問客に向けて発砲しました。さらに村を襲撃し、また家を燃やしました。金曜日にあった最初の攻撃よりも2回目の攻撃の方がより攻撃的でした。そのため遺族は、殉教者を埋葬する機会をほとんど得られませんでした。彼の埋葬が終わるやいなや、村の若者たちは、入植者たちから可能な限り村を守り抜くために急ぎました。入植者の攻撃からコミュニティを守るためにできる最低限のこのために。正直なところ、現在私たちが生活している場所は、何の保護もなく、医療現場や負傷者にとって最も安全な場所であるはずの保健センターでさえ、もはや安全ではないというこの上ない困難に直面しています。もう安全な場所はどこにもありません。診療所は安全と健康を守る拠点であるはずなのに。私たち医療従事者自身が恐怖に怯えています。

司会：ニダさんへの最後の質問です。今日診療所で働いているのは彼女だけなので、ニダさんはすぐに診療所に戻らなければならないのです。イスラエル人入植者が家や車を燃やした時、どんな状況を目撃しましたか？どのような怪我が発生していましたか？

ニダ：子どもも女性も男性も、全員がIII度熱傷（訳者注：表皮、真皮、皮下脂肪層の3層すべてに損傷が及び、汗腺、毛包、神経の末端部も破壊されるようなひどい火傷）を負っていました。イスラエル人入植者が使っていた可燃性の液体は、あらゆるものをあっという間に燃やしてしまうこれまでに見たこともないものでした。想像を絶する速さで体全体に広がる様はまったく普通ではなく、不自然なほどでした。そうしたなかで私たちは誰を最初に助けるべきかわかりませんでした。子ども？女性？私たちは今までの人生で見たこともないような極端な熱傷を目の当たりにしたのです。イスラエル人入植者が使った可燃性の液体は、耐えられないほど効果的で素早く、視界に入るものすべてを焼き尽くします。家々、金属製のドア、岩の壁……すべてを溶かし、爆発させます。この液体が何なのかわかりませんが、村のあらゆるものに向けられ、数秒のうちに、すべてが炎に包まれました。家、車、畑、人の肉……かわいそうな人たち、私たちは子どもを抱いて安全な場所に運ぶか、少なくとも炎から遠ざけるのがやっとでした。すでに火傷を負った子どもたちを。あの液体は恐ろしいものです。世界的に違法であることは間違いありません。このような光景は今まで目にしたことはありません。こんな大怪我を見たことはありません、アル・ムガイル村以外で。かわいそうな負傷者の銃弾の傷を治療しようとすると、皮膚が火傷しているのがわかりました。負傷した部位は一カ所ではなく、全身を負傷しているのです。私たちの手元にはない多くの医療器具が必要で、それらが手に入

ったとしても治癒には時間がかかります。私たちの診療所にあるのは殺菌消毒剤とガーゼだけ。そんなものでどうやって必要な治療できるでしょうか？火傷用の薬や軟膏でさえ、私たちの診療所にはもうありません。病院に着くまで、あるいは救急車から出るまで負傷者の状態を安定させるために、薬局に行き、一番簡単な薬や軟膏を自腹で購入する。これが負傷した人たちに私たちが提供できるすべてなのです。少なくとも最低限の医療を提供できるよう、救急用具や備品をしっかりと常備しておく必要があります。村から出られない人たちや、イスラエル人によって村から出ることを禁じられている人たちへの医療支援のために、私たちが無力さを感じずに、基本的な助けだけでも施せるように。必要最低限のもの、また暴力が発生して重度の火傷や銃弾による負傷者が出た時に必要な医薬品を提供してくれるよう、すべての関係者に期待します。村が閉鎖され、数時間にわたり誰も出入りできなくなった時でも、村の人びとに何らかの保証ができるように。私たちには、住民を助けるための基本的な物資と能力を持つ権利があります。私たちには、医療援助や援助戦略を得る権利があります。にもかかわらず、今、私たちは立ちすくみ、誰からも無視され、まともに仕事をすることができていません。誰も助けてくれないし、援助もしてくれません。誰もが、私たちが何を抱え、何に苦しんでいるのかを知っているはずです。私たちが直面しているのは特殊な状況で、この地域は入植者に完全に囲まれており、彼らが村を封鎖したら、私たちにできることは何もありません。村外からは救急車が1台来るだけで、助けが来ようとしても拒否されるのです。隣村から救急車が来たとしても、イスラエルが入村を許可するかどうか確認しなければなりません。そして攻撃が始まれば、また救急車を呼ぶのです。救急車は負傷者が出てからしかやってきません。本来は、負傷者が報告される前に救急車が到着しているべきです。そうすれば、負傷者が出たその瞬間に行動を起こし、可能な限り役に立つことができるのです。おわかりいただけたように、私たちが生活している現実の状況は、これ以上詳しく説明したり、繰り返したりする必要がないものです。イメージと現実とは明確であり、混乱や複雑さはありません。すべて植民地支配による暴力であることは明らかです。私個人としては、正直なところ、神に誓って、私たちは何をすべきかわからない立場に置かれていると感じます。どうすればいいのでしょうか？目の前で負傷者が血を流しているのに、何もできません。これ以上できることはないのですが、罪悪感を感じるころまで来てしまいました。一人を助けることはできましたが、もう一人を助けることはできませんでした。私にはすべての人を助ける能力はありません。それなのに罪悪感を感じてしまうのです。どうしたらいいのでしょうか？少しでも状況が良くなることを願っています。そして、また新たな事件が起きました。いつ何が起こり、どんな対応をすべきなのかは予測できません。1時間後、2時間後に何が起こるかまったくわかりませんが、どんなことでも起こり得ると思っています。最も攻撃的な集団虐殺を目の当たりにしてきただけに、この村では、予想外のことが起こり得ると言わざるを得ません。新たな攻撃による負傷者、攻撃初日のようなひどい負傷者

が出ることも予想されます。私たちがどのような状況に置かれているかを知り、私たちの声を聞き、私たちの姿を見て、私たちを支援してほしいのです。私たちがこの土地の権利を持つ者であり、支援を受けるべき人間であると認識してくれることを願っています。イスラエル人入植者たちは、私たちの土地を燃しています。彼らは、私たちや私たちの土地に対してやりたい放題にふるまっています。しかし、私たちは何があってもこの土地を離れはしません。ここは私たちの土地であり、私たちにはここにとどまる権利があるのです。彼らがどんな恐ろしい行動をとろうとも、私たちはここから離れません。神の思し召しにより、事態が好転すること、状況がこれ以上悪化しないことを願います。神の思し召しにより、今回は幸せな機会に皆さんとお会いできますように。本当にありがとうございました。

司会：お忙しいでしょうから、これ以上お時間をいただくことはありません。ありがとうございました。

ニダ：お時間と労力を割いていただき、私たちの声を世界に届けていただきありがとうございます。願わくば、私たちの声が地球の隅々まで届き、誰もが私たちが経験していることを目撃し、助けてくれますように。私たちはただ、私たちが無視され、自分たちだけで生きていくことにならないことを願うだけです。神の思し召しにより、事態は好転していくと信じます。皆さん、ありがとうございました。

司会：村の診療所の看護師であるニダ・ナーサンでした。次は農家の友人です。アミン・アブ・アリアさんです。村議会の議長です。村議会のメンバーとして、先週起こったことを詳しく教えてください。皆さんは入植者の手によってどのようなことを経験しましたか？入植者による攻撃は何日続きましたか？現在の状況はどうか？ジェノサイドが始まってから現在に至るまで、アル・ムガイル村はイスラエル人入植者によってどのように攻撃されていますか？

アミン：皆さんこんにちは、アル・ムガイルへようこそ。村の人口は約4000人です。私たちの村はラマッラーの街の北東35キロ、ラマッラー県の東端に位置しています。私たちの村の土地はヨルダン溪谷にまで達しており、ラマッラー県に属する最後の（一番東の）村と考えられています。私たちの村は、1970年代の初めから長年にわたって集団虐殺を経験しており、イスラエル占領軍の兵士に攻撃されてきました。彼らは

私たちの村を支配し、村の土地に軍のキャンプを設置しました。そして、70年代の終わりから80年代の初めにかけて、私たちの土地に入植者のためのアパルトヘイト道路を建設しました。この道路は村の500メートル東を通り、村の土地を分断しています。その当時から、私たちに対するイスラエル人の扱いは非常に問題でした。彼らは、この地域が私たちの村の食料供給地であることをよく知っていながら、様々な戦略を使って、何度も何度も、強制的に、アル・ムガイールの人びと、農民を追い出し、農場を空にしようとしてきました。アル・ムガイール村は、羊・山羊・牛の放牧や（オリーブなどの）季節的な農業で知られていて、村の収入源は、この地域に100%依存しています。入植者専用道路の背後にある土地が、村人にとっての主な収入源となっているのです。悲しいことに、占領軍はそれを知っていて、戦術として使っているのです。かつて彼らは農民を捕虜にし、土地から追い出しました。そして、極端な罰金を科したのです。羊を没収したり、拘束したりもしました。言い換えれば、私たちは長年にわたり、様々な形の攻撃や侵略を経験してきたのです。2000年代に入ってからは、村の土地に新たな入植地ができていくことに衝撃を受けました。その後も入植者たちによる新たな前進に驚かされましたが、彼らは結局私たちの土地に牧歌的な入植地のかたまりを建設してしまったのです。イスラエル政府は、こうした入植について、費用を抑えてより多くの土地を手に行ける方法だと捉えています。入植者は、他の入植者10~12人と羊の群れとともに、好きな丘の上に住もうとします。投資や生活のためではなく、より多くの土地を占有し、支配するための手段として、です。彼らは、見渡す限りの土地を自分たちのものだと思っています。そして、私たちの仲間を直接攻撃し、農民を煽り始めました。農民の収入や生活に直接害を与える方法として、家畜の群れを追い詰め、農民を煽ります。彼らは特に、ベドウィン（遊牧民）のコミュニティや農民、この地域の土地と農業に完全に依存している人びとを標的にしました。土地へのアクセスがますます難しくなり、コストがかかるようになると、すべての遊牧民と農民に、彼らの手に負えないほどの悪影響が及びました。土地は、別の種子や代用品で置き換えることはできません。そのため、多くの農民は転職を余儀なくされました。500頭の山羊を飼っていた農民は、100頭にまで減らすことを余儀なくされましたが、最近では、山羊をまともに飼うことさえできなくなっています。山羊を小屋から出すことさえ許されないのです。そしてもちろん、こうした入植者の攻撃は、武装している入植者を守るイスラエル占領軍の兵士たちと協力して行われているのです。占領軍は、扇動者であり、問題を引き起こす入植者を保護し、入植者たちが攻撃的な力でパレスチナ市民を攻撃するのを許しているのです。悲しいことに、イスラエルの占領軍兵士たちは、何が起きているのかを知らず、パレスチナ市民を拘束します。被害者が拘留され、嫌がらせをする側が保護されるのです。そして、被害者であるパレスチナ人は、彼らの経済力を超える不当に高額な罰金を払えるまで、囚われの身となります。2023年10月7日、入植者たちがイスラエル占領軍兵士の支援を受けて村を襲撃し、農民のための道路を寸断し、農民を直接攻撃し、彼らの簡素な家に押し入りました。簡素な家

というのはテントです。そのテントに真夜中に火をつけ、テント全体が燃え尽きるまで、私たちに火を消させてはくれませんでした。入植者たちは攻撃を仕掛けた後、村への入り口をすべて閉鎖しました。そのため、多くの農民は近隣の村に住むことを余儀なくされ、いつか戻ってこられるという希望を胸に、私物をすべて置いていくことになりました。しかし悲しいことに、入植者たちは、村の住民の私物をすべて破壊し、燃やしてしまいました。**目に入るものすべてを押収するか、燃やすかしたのです。ここ数カ月に起こったこうした集団虐殺はすべて、イスラエル占領軍の保護下で行われているのです。最も知られている攻撃は、4月12日の金曜日に起こりました。イスラエル人入植者たちが私たちの村や農民を攻撃するのはほとんど毎日のことです。最初でも最後でもありませんが、最も大規模で攻撃的な攻撃のひとつだったと言えます。**本人たちは否定していますが、金曜日には計画的な攻撃であったことがわかりました。彼らは、若い入植者の男性が行方不明になったことがこの攻撃の理由だとし、私たちがそれに関与していると考えているようですが、私たちはそのことに大きな疑いを持っています。彼らがそれを口実に以前から計画していたことを実行に移したのは明らかです。この1年あまり、ベン・グヴィールなどの政治指導者が入植地を時折訪れ、パレスチナの村の人びとを強制的に移住させるために、牛の群れを連れた農民を襲い、焼き払い、盗みや危害を加えることを奨励していました。占領軍は私たち全員を追い出し、土地を奪おうとしているのです。イスラエル当局が入植者たちにそのような行為を奨励した結果、一度に20人から50人、もしくは100人ほどの入植者たちが私たちの畑や通りを走り回り、農民とその家族、土地、家畜の群れ、車を襲うようになりました。最近になって、そうした入植者の数は劇的に増えています。**金曜日には、1500人の入植者が私たちの村に押し入り、目に入るものすべてに火をつけました。しかも1500人のほとんどは機関銃やピストルで武装していました。**にもかかわらず、悲しいことに、占領軍は入植者たちとともに村に入ってきて「彼らは村を攻撃するつもりはない。単に行方不明者を探しにきただけで、君たちや君たちの所有物を傷つけるつもりはない。とにかく動くな。静かにしていれば傷つけられることはない」といった言葉で人びとを落ち着けようとした。一方で、占領軍は村への入り口をすべて閉鎖しました。正面入り口だけは開いていたものの、その正面入り口に検問所を設置し、現在アル・ムガイール村は閉鎖された軍事区域であると述べたのです。この間、1500人の入植者以外は、誰も出入りさせませんでした。入植者たちは村の北、西、東のグループに分かれて村中に広がりました。各グループは50～100人ほどで、私たち住民を直接攻撃し、家や人びとに対して実弾を撃ち始めました。90歳を超える母親と父親、その子どもや孫を含む14人の住人が住んでいる家から攻撃を始めました。パレスチナ人にとって、金曜日は宗教的な日であると同時に、すべての家族がリラックスし、また団結する日です。だからこそ、あの家には多くの人が集まっていた。家に住んでいた人だけでなく、遊びに来ていただけの家族もいました。その彼らが、武装した入植者の暴徒に家を取り囲まれ、実弾を撃ち込まれたのです。どれほどの衝撃だったで

しょう。救出に行った私たちも入植者の暴徒に襲われました。しかし、私たちは家族の元に辿り着き、負傷者を運び出すことができました。後に殉教者となったジハードもこの時はまだ息がありました。私たちは外に出る途中、占領軍と行き合いましたが、占領軍は、村の中を移動しているものはたとえ医療従事者でも発砲してきました。この時点では、救急車も民間防衛車両ももちろんないので、私たちは自家用車を使って負傷者のところへ向かいました。入植者たちは家々に火をつけ始め、火が大きくなるにつれて負傷者が増えていきました。私たちが対処できる能力を超えていました。それでも私たちは負傷者を自家用車に乗せ、病院に運ぼうとしましたが、村の西側の入り口で2時間以上も拘束されることになりました。私も自分の車で2人の負傷者を乗せていましたが、村の入り口に着いて愕然としたのは、私が先に救急車に乗せた負傷者が1時間経った時点でもまだそこにいたこと、自分の車にいる他の2人の負傷者を降ろすことを禁じられたことです。しばらくして、救急車は村に1台しか入れなくなりました。検問所を越えることが許されたのは、この救急車1台だけで、別の救急車が村に入ることは許されなかったのです。私たちは9人の負傷者を1台の救急車に乗せなければなりません。同時に、兵士たちは「誰も負傷者と一緒に行くことは許されない」と繰り返し叫んでいました。私は運転手の隣に乗り、少しでも助けになろうとしていましたが、彼らは私たちを30分間も拘束しました。せめて医師だけでも一緒に行かせてくれるよう頼みましたが、それも許可されませんでした。彼らは、医師を救急車から無理矢理連れ出し、9人の負傷者を救急車の中に閉じ込めて、出血多量で死に至らしめたのです。ようやく救急車が病院へ向かうのを許可された時には、ジハードは出血多量で救急車の中で息絶えていました。彼の魂に安らぎがありますように。彼は少なくとも2時間は、救急車の中で出血し続けていました。この2時間がなければ、彼は今もまだ私たちと一緒にいたかもしれません。

入植者たちはまた、120頭の羊も盗みました。さらに村の中で50頭から60頭の羊を殺しました。彼らは木々を引き抜き、家々を燃やし、70人以上を負傷させました。その中には子どもや女性もいました。アル・ムガイール村に住む私たちにとって、入植者たちの目的は明白です。目的はただひとつ、彼らの攻撃によって私たちの中に十分な恐怖心を植え付け、自分の家と土地を放棄するように仕向けることなのです。村の位置が彼らにとって重要なかもしれないし、この土地を奪う計画を立てているのかもしれません。彼らがどんな計画を持っているかはわかりませんが、12日の金曜日から2日後、イスラエル国境警備軍が村にやってきて、村はずれに家がある家族たちに対してこう言いました。ベン・グヴィールがやってきて、また村を攻撃するための武器を供与したから、今すぐ村を出たほうがいいと。もちろん、村の人びとは彼らを見做し、村から出ることを拒否しています。**私たちの村としてのメッセージは、どんな代償を払っても、私たちは自分たちの土地で揺るがないということです。なぜなら私たちパレスチナ人は、子どもたちとオリーブの木を対等なものと考えているからです。子どもたちと土地に対する愛情はひとつであり、同じものなのです。**

司会：ありがとうございます。次の発言者は、農民であり、農業協同組合のメンバーでもあるガッサン・アブ・アリアさんです。農民として、また農協の組合員として、金曜日に何が起こったのか、また一般的にイスラエルの植民地支配によって経験してきたことをお聞かせください。

ガッサン：農民として、私たちは長期にわたって攻撃に直面してきたし、今現在も直面しています。入植者たちは、植樹の季節が始まると、私たちの木を切り倒し、木の手入れをしている私たちに嫌がらせをし続けるのです。イスラエルは、私たちの土地の多くを没収し、私たちの土地への立ち入りを一切禁止します。私たちは木や畑で作物を収穫することさえ許されないのです。これは毎日、毎月のことです。**私たちの農地が減らし続け、住民が所有権を持つ農地が数千ドゥナム（1ドゥナム＝1000平方メートル）はあった村が、今では私たちの家の周りだけになってしまいました。今ではわずか数キロメートルの範囲になってしまったのです。このような攻撃や集団虐殺は以前からありましたが、この半年で急激に増え、より暴力的になりました。**監視カメラが設置されたある場所では、建物の前を通り過ぎる者がいれば撃たれます。牛を飼っている農家は、牛を放牧に連れて行けなくなってしまいました。自分たちのオリーブの木にもアクセスできなくなり、この1年、誰も自分のオリーブの木を守ることができませんでした。オリーブは1グラムも収穫できませんでした。オリーブの木へのアクセスを禁じられたせいで、私たちは今シーズンのオリーブの実をすべて失ってしまったのです。第二に、私たちは、丘の中腹の土地にたどり着くことを禁じられています。畑を耕したり、土地を整えたりすることは一切許されませんでした。移動してもいいのは、村の建物の中と道路だけだということです。多くの牧夫が、放牧やオリーブの実を収穫しようとして負傷しました。オリーブの木を剪定したり、守ろうとしたりして、負傷した者も多いです。繰り返しになりますが、現在このような非常に攻撃的な攻撃は、入植者と占領軍によって毎日のように行われています。こうした攻撃によって、オリーブの実を収穫しようとしていた農民やその子どもたちが命を奪われたこともあります。農民たちは負傷し、殺され、土地を追われ、羊や山羊を没収され、農具を没収される。**これは、村の全領域を掌握し、私たちを追放することを目的とした絶え間ない嫌がらせです。彼らは私たちの存在を望んでいません。彼らにとって、パレスチナ人の存在は危険であり、それが子どもであろうと女性であろうと関係ないのです。私たちがこの土地に存在し、この土地で働くということは、彼らが私たちに嫌がらせをし、拷問し、殺すのに十分な理由なのです。**イスラエル占領軍の兵士たちは、こうした攻撃に際して入植者たちを保護し、支援しています。兵士たちは、これが自分たちの仕事であり、他の誰でもなく入植者を守るのが彼らの仕事だと言います。彼らは、入植者たちが村人を撃ち、殴り、村を燃やすのを見ているだけです。パレスチナ市民が被害者であるに

もかわらず、兵士たちは攻撃を見守り、彼らの「保護」を確実にするために入植者たちに加担しています。子どもであろうと女性であろうと関係なく危害を加えてきました。アル・ムガイールの農民である私の体験を要約してお伝えしました。私たちが日々直面している攻撃と不正義の話です。

司会：ありがとうございます。パレスチナの農民として、そしてアル・ムガイール村の一員として、あなたはどのように、そしてなぜこれほどまでに自分の土地に固執するのでしょうか？あなたやあなたの子どもたちやあなたの家族と土地との関係は？これほど多くの攻撃を受けても逃げないのはなぜですか？これほどの攻撃があっても、あなた方はどうしてこれほどまでに不動なのですか？入植者たちに恐怖や不安を感じないのでしょうか？彼らがあなた方の土地を没収しようとしているのに、あなた方全員が自分の土地にとどまっているのはなぜですか？

ガッサン：金曜日と土曜日にここで起こったことを目撃した誰もが、民間人に対する戦争のような一方的な攻撃を目にしました。私たち市民は、不動の心以外に自己防衛機能を持っていません。入植者たちはそのことを知っていながら、それでも私たちの家を攻撃し、燃やしたのです。子どもたちのいる家まで放火しました。そして、他の人を助けるために家の外に出た人は誰でも銃撃されました。彼らは家に入り込み、子どもを救いに来た人に火をつけたり銃で撃ったりしたうえに、家の中から火を放ったのです。**私と私のコミュニティ、そしてパレスチナ人一般と土地との関係はとても深いものです。私は祖父から、祖父は彼の祖父から、その彼もまた自分の祖父から、そうやって代々この土地を受け継いできたのです。土地は、私たちの遺伝子、私たちの心に深く根ざしている私たちの一部なのです。ここが私たちの故郷であり、ここ以外に私たちの居場所はありません。私たちは愛情を持って、粘り強くこの土地にとどまります。支配、占領、植民地主義という要素以外、この土地とは何のつながりもない別の国からやってきた入植者たちに屈したり、土地をあきらめたりすることはありません。私たちのルーツはこの土地全体に広がっています。私たちはすべての岩と土の粒を知っています。何百年もの間、この土地に存在してきたすべての木々を知っています。どの農家に尋ねても、彼らはこの土地を何世代にもわたって理解しており、すべての岩や砂と親密な相互関係にあると答えるでしょう。だから何があっても、私たちは揺るぎないのです。あと100回攻撃されるかもしれないとしても、私たちはこの土地を離れません。攻撃はさらに激しくなることは分かっています。しかし、農民として、この村の人間として、私たちはこの土地を離れることはありません。**

司会：ありがとうございました。次にUAWCの国際アドボカシー・オフィサーのヤスミン・エル＝ハサンさんです。

ヤスミン：歴史的パレスチナのあらゆる場所におけるイスラエル人入植者による暴力の激しさは、イスラエルによるセトラー・コロニアリズム（入植植民地主義）支配という広い文脈の中で起こっています。入植植民地主義とは、その土地の先住民を排除し、強制的に移住させ、入植者の人口に置き換えることです。つまり、入植植民地主義の基本は、土地の収奪にあるといえます。土地がすべてなのです。それが、私たちが聞き続け、経験し続けていることです。入植植民地は、世界中が目撃し、私たちパレスチナ人も76年以上にわたって経験してきたように、土地を強制的に奪うためなら何でもします。その中には、土地を破壊し、搾取し、人びとを大量虐殺することも含まれます。イスラエルによるヨルダン川西岸地区での入植植民地事業の拡大は、イスラエルによるガザ地区への虐殺戦争と並行して進行しています。ヨルダン川西岸地区内には、イスラエルがパレスチナ人の移動を制限するための障害物が少なくとも759あります。これらは、道路、コミュニティ、農地、都市、食料市場、水源、医療、教育施設、必要なサービスへのアクセスを制限しています。**ガザ地区では、イスラエルの占領がこれらすべてを破壊しました。そしてヨルダン川西岸地区では、イスラエル占領軍がアル・ムガイール村のようなパレスチナ人コミュニティの孤立を作り出そうとしているのです。パレスチナの食料システムと土地を標的にし、混乱させ、破壊することは、イスラエルの入植植民地主義の戦術的戦略です。**その結果が、何万人もの殉教者をうむような人道問題であるか、イスラエルが過去6カ月の間に排出した数十万トンの温室効果ガスのような環境問題であるかにかかわらず、先住パレスチナ人と土地との関係や土地との相互依存を断ち切ろうとしているのです。食料主権を求める私たちの闘いは、国家主権やパレスチナ人の自決を求める闘いとも必然的に結びついています。さて、私たちは土地の話をしてきました。私たちの土地から私たちの生活の糧が生まれます。つまり、土地を攻撃することは、それらを奪おうとすることであり、パレスチナ人が食べられなくなることを意味するのです。そのため、私たちは、食料安全保障ではなく、食料主権について意図を持って話をします。いかなる規模の食料不安も、資源の不足が原因ではなく、人為的なものです。食料不安は人間が作り出したものです。ですから、もし私たちが天然資源と土地の主権を手に入れることができれば、パレスチナは食料安全保障を手に入れることができるでしょう。ガザの人口230万人、その半数以上は子どもたちですが、彼/彼女たちが飢餓に直面することはなかったはずですし、アル・ムガイール村のような農村地域が現在のような苦難に直面することもなかつ

たでしょう。これは人為的なものなのです。ヨルダン川西岸地区とガザ地区のパレスチナ人を、私たちの土地に本来根付いている生計手段から切り離すことで、占領は入植者の植民地化計画を進めようとしているのです。ゆえに、パレスチナ人の闘いは、生活と存在の闘いであることを知ることも重要です。GDPだけでは表せないし、一人当たりの成長率の話で安心することもできません。私たちと土地との関係は、抽象的なものではなく、非常に物質的なものです。私たちは土地に根ざしています。それは単なる象徴的な関係ではなく、共生的なものです。相互関係です。そしてこの土地の先住民として、パレスチナ人は土地の管理人なのです。私たちはこの土地の世話をし続けるのです。

司会：ヤスミン、ありがとうございました。では、質問が入っていますので、それに答えてもらいたいと思います。「入植者と軍隊の関係をどう説明しますか?」「米国の制裁は入植者に影響を与えるのでしょうか?」という質問です。

モアイヤド：**10月7日から現在に至るまで、イスラエル人入植者はイスラエル軍を利用して攻撃を行っています。**それ以前、イスラエル人入植者は、ヨルダン川西岸地区のエリアCの農地や村落、農村地域で軍事検問を行うことはできませんでした。現在ではイスラエル人入植者の警備隊が軍事検問を実施できる状況になっています。彼らは路上で誰でも検査し、呼び止め、ヨルダン川西岸、特にナブルス南部のどの場所でも数分以内にイスラエル警察を呼び寄せることができるのです。イスラエル人入植者の警備隊は現在、イスラエル軍内部で行動しています。**多くの場合、イスラエル人入植者は軍服に身を包んで攻撃を仕掛けています。**マダマ、クスラ、ビュリン、アル・ムガイールで（そのことが確認されています）。また、10月7日以降、イスラエル軍は、緊急事態下であり、戦時下の法律が適用されると主張しています。そのため、入植者はすべて軍の一員でもあるのです。私たちや農民にとって、イスラエル人入植者とイスラエル軍に違いはありません。彼らは入植者としてではなく、軍隊として行動しているからです。先週4月12日から16日にかけて段階的に行われたのは、入植者を「守る」ために軍隊と入植者が並行して働くという形のものでした。昨年10月初、ベン・グヴィールは、3万人以上のイスラエル人入植者を武装させました。パレスチナ人を攻撃するために入植者民兵のようなものを作り始めたのは偶然ではありません。パレスチナ人に対する先日の攻撃も偶然ではありません。1500人以上の入植者による組織的なテロ攻撃です。同時に25のパレスチナの村に侵入しており、イスラエルの「一般市民」とは言えません。武装しており、イスラエル軍の一員です。看護師

のニダさんが話していたように、イスラエル人入植者は、一般市民が決して持たないような武器や軍専用の資材を使用し、家の中で大火傷を負わせたり、火をつけたりしたのです。制裁による影響については、私の同僚のヤスミンがお話します。

ヤスミン：ありがとうございます。ご質問である米国の制裁の潜在的影響、あるいはそもそもの米国の役割についてお話します。世界には、イスラエルによるパレスチナ人虐殺や入植者による植民地主義の単なる共犯者ではなく、積極的に加担している多くのアクターが存在していると言わねばなりません。**特に米国は、ガザに落とされている爆弾や、ここアル・ムガイールで子どもたちを傷つけ、殺している武器など、イスラエルによる大量虐殺に資金を提供しています。米国と他の数カ国は最近になって、ここ数カ月の間に、入植者個人に対する制裁を課しました。この制裁措置は、第一に、遅きに失しており、第二に、制度的問題を個人の問題にすり替えてしまっています。入植植民地主義、占領という問題の根本には触れていないのです。むしろ、一握りの入植者を指摘し、あたかもその個人に問題があるかのように見せかけています。私が好んで使う比喻があります。アパルトヘイトの壁を築き、その上に絵を描くために絵の具を供与する国際的なアクターがありますが、壁を作ったのは彼らです。私たちは壁を美しくしたいのではありません。撤去してほしいのです。それと同じように、例えば米国やその他の国際的なアクター、国や州が実際に行動を起こせば、問題の核心や根源に対処できるでしょう。武器禁輸措置を講じ、個人だけでなく、イスラエルという国家による占領に対して制裁を加えるべきです。国際法上違法である占領地—ヨルダン川西岸地区—における入植地で生産されたイスラエル占領地商品からのダイベストメント（投資引き上げ）を行うべきです。特に選挙を間近に控えた米国では、米国政府が民意に従って行動していないことや大量虐殺に積極的に加担していることへの不安の高まりを、少数の個人に経済制裁を課すことで揉み消そうとしていることに注意が必要です。**

司会：それでは最後に、ご意見やご発言がありましたらお願いします。ガッサンさん、最後に何かコメントはありますか？

ガッサン：農民としての暮らしの安定を確保するために、私たちは皆さんからの支援と基本的なニーズを切に必要としています。今回の攻撃で失ったものを補い、ゼロになったところから再び築き上げることができるようにするためです。すべてが差し押さえられ、焼き払われた今、ゼロからやり直さなくてははいけません。仕事も家もなく、衣服や子どもたちのための基本的な必需品など、持ち物を一切持たずに火災から逃れた人

たちが多くいます。少なくとも、彼らが生き延びるための支援、農家には農具などの支援が必要です。私たち農民は農具や家畜の群れのほとんどを失いました。家畜の飼料も失いました。家と生計手段の両方を失った人も多くいます。今回の記者会見は、少なくとも主要な基本的ニーズの支援のためのスタートになるでしょう。それが、私たちが私たちの土地で生きていくための助けになります。村の人びとがある程度普通の日常生活に戻れるように、このような攻撃を受ける前の生活に戻れるように。お時間をとっていただき、本当にありがとうございます。

モアイヤド：この会議は、ここアル・ムガイール村や攻撃を受けている他の村の状況についての重要な会見です。**私たちはアル・ムガイール村からこの会見を行っていますが、私たちが話している間にも、イスラエル人入植者と軍が侵攻を始めています。**彼らは今、村の東側にいます。これは、**人びとが沈黙してはならないというメッセージであり、**パレスチナ人に対するこうした犯罪についてももっともっと語るべきだということです。また昨日、イスラエルの財務相は、ヨルダン川西岸地区にあるイスラエルの前哨基地23カ所を合法化すると発表しました。これは、入植者に対する米国やEUの制裁は無意味だ、という表明です。パレスチナ人に対する大規模かつ組織的な攻撃に対して、私たちUAWCは全国的な農民支援団体として、農民への寄付や支援を継続し、彼らの不屈の精神を支援するというメッセージを改めて発信します。今、状況は非常に複雑で、イスラエルはガザ地区だけでなく、ヨルダン川西岸地区でも飢餓戦争を続けています。イスラエルは、パレスチナ人の土地への立ち入りを禁止し、パレスチナ人を自分たちで食料を生産するのではなく、人道援助の消費者のようにしているのです。ありがとうございました。

ヤスミン：私の友人たちが語ってくれたこと、そしてモアイヤドがUAWCについて今話したことに賛同します。2023年10月、イスラエルによる大量虐殺戦争が勃発した後、UAWCは「Stop Gaza Starvation（ガザの飢餓を止める）」という支援キャンペーンを開始しました。ガザ地区とヨルダン川西岸地区のコミュニティが緊急に必要としている支援を行うものです。それ以来、物資を再配分し、コミュニティを存続させるために、想像を絶する危険の中で働いているガザの仲間たちの不屈の精神、回復力と強さのおかげで、驚くべき前進を遂げてきました。UAWCは、少なくとも9万6975人の受益者に必要不可欠な援助物資を配布することができました。これには食料小包、衛生用品、マットレス、毛布、薪などが含まれています。さらに、少なくとも17万2000人に飲料水を供給することができました。現在は、清潔な飲料水を供給するための井戸の復旧に力を入れて取り組んでいるほか、コミュニティの衛生施設の復旧、農地の復旧に取り組んでいます。ガザ地区とヨルダン川西岸のエリアCの状況が急速に悪化し続けるなか、UAWCとして、国際社会に対し、

パレスチナの草の根の努力を支援し、強化するために、この支援キャンペーンに貢献するよう呼びかけます。また、パレスチナとパレスチナ人は、世界中の良心ある人びとに呼びかけます。正義のために立ち上がること。抗議すること。BDS—ボイコット（不買）、ダイベストメント（投資撤退）、サンクション（制裁）—に取り組むこと。現状を打破すること。私たちの闘いはひとつであることを世界に知らせましょう。私たちの解放は、集団的なものです。そして、その闘いと集団的解放を通じて、パレスチナは自由になるのです。世界中で、何百万人、何千万人という人びとが街頭に立っています。ここパレスチナから、私たちは見えています。世界中の大学における学生の運動、イスラエル関連企業からの投資を引き上げる要求を通すこと。私たちは見えています。今まさに歴史的な抗議行動に取り組んでいるコロンビア大学の学生たち。私たちは見えています。正義のため、そして社会から疎外され、植民地化され、抑圧されたコミュニティのために立ち上がる若者や年長者たち。私たちは見えています。集団として、私たちは現在起こっていることが「通常」になることを拒否します、共に立ち上がります。そう、私たちはあなたたちと共に立ち上がります。私たちは、想像を絶する規模の人為的大災害の真っ只中にいますが、私たちは不動の民です。私たちの土地を大切にし、互いを思いやるのです。解放の時まで、そして解放の後も。ありがとうございました。

日本語訳：野川未央（NPO法人APLA）

*太字は、UAWCの記録（英語版）をそのまま反映したものです。